

〈歌人〉深養父の評価に関する一考察

坂本美樹

一、はじめに

清原深養父は、後撰集撰者の元輔の祖父、そして清少納言の曾祖父であり、『百人一首』に次の歌が採られたことでも有名な歌人である。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ
深養父の系譜については、史料に異同があるものの、先行研究等を参考に系図を示すと、次のような形となる。^①

〈清原氏系図〉

天武天皇……貞代王——有雄——通雄——海雄
——房則——深養父——春光——元輔——清少納言

さらに、深養父の官歴については、鎌倉前期成立の『中古歌仙三十六人伝』に、

延喜八年正月十二日任^二内匠大允^一。延長元年六月廿二日任^二内蔵大允^一。八年十一月廿一日叙^二従五位下^一。御即位叙位^②諸司勞廿年

とある。深養父の補任・生没年については詳細な記録が少なく、『中古歌仙三十六人伝』が最も詳しい記録である。このような記述から、深養父は天武天皇を祖とする家系に生まれながらも、その官位はふるわなかつたことが窺われる。^③

また、歌人としての活躍について、『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）は次のように記している。

〔平安時代中期歌人〕清原。生没年未詳。豊前介房則の男。元輔の祖父、清少納言の曾祖父。延喜八908年に任内匠大允、延長元923年に内蔵大允、同八年に朱雀帝即位の叙位に諸司二〇年勤務の勞により従五位下となる。〔寛平御時中宮歌合〕に紀貫之・紀友則・凡河内躬恒らと共に名が見え、〔宇多院歌合〕にも名が見える。『古今集』に一七首入集するのをはじめ、勅撰集に計四一首入集している。その和歌は同時代の紀貫之・友則らと共通する理知的な傾向を持ち、古今集的歌風を形成した有力歌人の一人である。家集に『深養父集』がある。

（三木雅博氏担当）

傍線部に示されているように、深養父は官位こそ高くなかったものの、『古今集』に一七首入集』していることから、古今集時代を代表する歌人であったといえよう。しかしながら、本項目の参考文献に掲げられている川村裕子氏は、深養父の歌人としての活動について「古今集時代に認められた歌人といつてよいだろう。」としながら、一方で次のように述べている。

…しかしながら深養父の評価は、その後、必ずしも高くはなかつた。例えば、藤原公任の『三十六人撰』には入っ

ていない。この事は、藤原清輔によつて「件撰有三不審。一、所レ謂、深養父、元方、千里、定文等不レ入レ之。」（『袋草紙』）と記されている。また、拾遺集にも一首採られているのみである。平安末期から鎌倉時代にかけては『後六々撰』『古来風躰抄』に入り、新古今集にも五首採られており、徐々に評価が高まつた。深養父独特の誇張表現・奇をてらつた古今集的詠風が受け入れられる時代とそうでない時代があつたようである。

川村氏と同様に、中村秀眞氏も深養父の歌人としての評価について、

『古今集』から百年後、公任は深養父を認めていない。長徳二年（九九六）頃に公任が撰した『拾遺抄』に、深養父の歌は一首もない。また公任の秀歌撰『三十六人撰』は後の三十六歌仙の一人にならなかつた。公任が考える宮廷和歌は深養父の歌を許容しなかつたのである。以後、平安末期をむかえるまで、深養父は和歌史にとりあげられない。

と述べ、藤原清輔の『袋草紙』によつて深養父の評価が復活し

たのだと主張している。拙稿「歌人・元方の評価に関する一考察」(関西大学国文学』第一〇〇号、関西大学国文学会、二〇一六年)において、『後拾遺和歌集』(以下、『後拾遺集』)から『千載和歌集』(以下、『千載集』)の時代は、『後撰和歌集』(以下、『後撰集』)以降を撰歌対象するため、元方がその時代の勅撰集に入集しなかったことを指摘した。⁶⁾したがって、深養父も元方と同じ理由からその時代の勅撰集に入集しなかったのであり、深養父の評価が低かったからではないと思われる。

王朝期における深養父詠の入集状況については、勅撰集・私撰集・歌合・秀歌撰と多岐にのぼる。また私家集として『深養父集』があり、(一)伝貫之筆部類名家集切(二)伝行成筆柙色紙(三)宮内庁書陵部蔵御所本の三本が伝わっているが、勅撰集において作者が他人詠や「よみ人しらず」となっている歌が含まれていたりと、逆に深養父の勅撰集入集歌が含まれていなかったりと、深養父自作歌と判断するには困難な状況である。⁷⁾よって、本稿では『深養父集』の評価と深養父の評価との関わりについては言及せず、勅撰集・私撰集・秀歌撰・歌学書類を一覧することによって、〈歌人〉深養父の評価を再検討したい

二、勅撰集の入集状況

深養父の勅撰集入集は、先行研究で指摘されているように四十一首にのぼる。【表一】は、それら四十一首を歌集ごとに分類したものである。また、どの深養父詠が勅撰集に入集したのかを一覧するため、【表二】を作成した。

【表一】に示したとおり、王朝期において、勅撰集入集数が圧倒的に多いのは『古今集』であり、入集数の順位も歌人総数一二六人のうち一〇位と大変高い。⁸⁾また、深養父存命時に催されたと考えられる『寛平御時中宮歌合』⁹⁾や、九一三年より前に成立したとされる『宇多院歌合』¹⁰⁾にも名前がみえることから、先述のとおり、深養父は『古今集』時代を代表する歌人であるといっても差し支えないであろう。また、『後撰集』では入集順位が二十二位と『古今集』よりだいぶ下がるものの、歌人総数が二二四人であることを考えると決して低い順位ではない。¹¹⁾よって、深養父が『古今集』から『後撰集』時代に高く評価されていたことは明らかである。

一方、先行研究でも指摘されているように、『拾遺集』では入集数が一首と、『古今集』『後撰集』と比較して少なくなっている。これについては、〈先行勅撰集に採られた歌は撰歌対象とし

【表一】深養父詠歌のみえる勅撰集の概要

作品名	成立	下命者	撰者	入集数 (和歌総数)
古今和歌集	九〇五年	醍醐天皇	紀友則 紀貫之 凡河内躬恒 壬生忠岑	一七(一一〇〇)
後撰和歌集	九五年	村上天皇	大中臣能宣 清原元輔 源順 紀時文	五(四二五)
拾遺和歌集	一〇〇五(一〇〇七年)	親撰	花山院	一(一三五)
新古今和歌集	一二〇五年	後鳥羽院	源通継 藤原有家 藤原家隆 藤原定家 飛鳥井雅経	五(一九七八)
続後撰和歌集	一二五一年	後醍醐院	藤原為家	一(一三七)
続古今和歌集	一二六五年	後嵯峨院	藤原基家 藤原行家 藤原光俊 藤原家良	二(一九一五)
玉葉和歌集	一三二二年	伏見院	京極為兼	一(二八〇〇)
続千載和歌集	一三三〇年	後宇多院	二条為世	一(二一四三)
続後拾遺和歌集	一三三六年	後醍醐天皇	二条為藤 二条為定	一(一三五三)
新千載和歌集	一三五九年	後光厳天皇	二条為明 二条為定	一(二三六五)
新拾遺和歌集	一三六四年	後光厳天皇	嵯阿	三(一九二〇)
新後拾遺和歌集	一三八四年	後円融天皇	二条為遠 二条为重	一(一五五四)
新統古今和歌集	一四三九年	後花園天皇	飛鳥井雅世	二(二一四四)

※ 一二重線より左記は中世の作品である

【表二】深養父詠歌勅撰集所収一覧

番号	初句	勅撰集(歌番号)
1	花ちれる	古今(二二九)
2	夏の夜は	古今(一六六)
3	神なびの	古今(三〇〇)
4	冬ながら(冬)	古今(三三〇)
5	雲るにも	古今(三七八)
6	あふからも	古今(四二九)
7	うばたまの	古今(四四九)
8	虫のごと	古今(五八一)
9	人を思ふ	古今(五八五)
10	こひしなば	古今(六〇三)
11	今ははや	古今(六一三)
12	みつしほの	古今(六六五)
13	心をぞ	古今(六八五)
14	こひしとは	古今(六九八)
15	ひかりなき	古今(九六七)
16	冬ながら(は)	古今(一〇二)
17	思ひけむ	古今(一〇四)
18	うちをへて	後撰(九二)
19	いく世へて	後撰(三二七)
20	あきの海に	後撰(三三二)
21	きえかへり	後撰(三三三)
22	空蟬の	後撰(八九六)
23	河霧の	拾遺(二〇二)
24	なくかりの	新古今(四九六)
25	煙たつ	新古今(一〇〇九)
26	うらみつつ	新古今(一三七七)
27	うれしくは	新古今(一四〇三)
28	昔みし	新古今(一四五〇)
29	うらみても	続後撰(八三九)
30	はなすすき	続古今(三三二)
31	ころにも	続古今(一四六二)
32	なにか世に	玉葉(二八八)
33	おしなべて	続千載(三四)
34	春雨や	続後拾遺(六二)
35	この川は	新千載(六二四)
36	草ふかく	新拾遺(四三七)
37	年をへて	新拾遺(九六六)
38	物おもへば	新拾遺(三三二)
39	春霞	新後拾遺(三四)
40	春日野に	新統古今(五)
41	さきにけり	新統古今(二二〇)

※ 歌番号、初句の表記は『新編国歌大観』による

ない」とする勅撰集の性格によるものとも考えられるが、『拾遺集』の雛型と考えられる公任撰『拾遺抄』には深養父詠歌が一首も採られていない。この点と『三十六人撰』の入集状況から、公任が深養父を評価していなかった可能性が高いが、二作品のみでは判断材料が乏しいことから、考察は第三章・第四章で行う。

次に、『新古今集』をみてみよう。ここで入集した五首がどの撰者に評価されていたのかを確認したい。岸上慎二・橋本不美男・有吉保編『校訂 新古今和歌集』武蔵野書院（一九六四年）によれば、各歌の撰者名注記は【表三】のとおりである。

【表三】をみてわかるように、入集した五首のうち、有家の撰歌が三首と最も多いことが分かるが、さらに注目すべきは一四五〇番歌を定家を選んでいる点である。後でも触れるが、定家

【表三】『新古今集』にみえる深養父詠歌と撰者名注記

【表二】番号	初句	巻名・部立・歌番号	撰者名注記
24	なくかりの	巻五 秋下 四九六	有家
25	煙たつ	巻十一 恋一 一〇〇九	有家・雅経
26	うれしくは	巻十一 恋五 一四〇三	有家
27	うらみつ	巻十五 恋五 一三七七	家隆
28	昔みし	巻十六 雑上 一四五〇	定家

※ 歌番号・初句の表記は『新編国歌大観』による

は秀歌撰や歌学書でも深養父詠を採歌しており、深養父に対し一定の評価があったことが看取されよう。

三、私撰集・秀歌撰・歌学書類の入集状況

前章では、勅撰集の入集状況から深養父の評価をみてきた。しかしながら、先述のとおり、勅撰集のみでは深養父の評価がみえてこないことから、本章では王朝期における私撰集・秀歌撰・歌学書類に範囲を広げて考察する。

私撰集・秀歌撰・歌学書類の入集状況を作品別に一覧すると、【表四】のとおりである。

【表四】をみて明らかのように、撰者は王朝期に活躍した歌人たちが名を連ねている。順を追ってみていきたい。

まず、①・⑨・⑫は、入集数の差によって評価がみえるものである。①『新撰和歌』は和歌総数三六〇首に対して入集数が二首と少なくみえるが、これは歌人総数・六十五人のうち十六位と上位であり、撰者である貫之が深養父を歌人として評価していたことが窺われる。また、⑨『後六々撰』（別名『中古三十六歌仙』）は、十首（二人）、八首（四人）、六首（二人）、五首（二首）、四首（五人）、三首（十三人）、二首（八人）と分かれ

【表四】 私撰集・秀歌撰・歌学書類における深養父詠歌の入集状況一覧

	作品名	成立	撰者	入集数(和歌総数)
①	新撰和歌	九三〇～九三四年	紀貫之	二(三六〇) ¹²⁾
②	金玉和歌集	一〇〇七年		一(七六)
③	深窓秘抄	一〇一〇～一〇二二年	藤原公任	一(一〇一)
④	和漢朗詠集	一〇二三年頃		一(二二六)
⑤	三十人撰(現行)	一〇〇七～一〇〇九年	具平親王	二(二一三〇)
⑥	新撰朗詠集	一一二二～一一三三年	藤原基俊	二(二〇〇三)
⑦	奥儀抄	一一三五～一一四四年	藤原清輔	一(六四五)
⑧	袋草紙	一一五九年	藤原範兼	一(八五一)
⑨	後六々撰	一一〇七～一一六五年	藤原俊成	四(二四六)
⑩	古来風体抄	一一〇一年	後鳥羽院	三(六一一)
⑪	時代不同歌合	一一二一年		三(二五〇)
⑫	定家八代抄(自筆本)	一一二五年		四(二八〇九)
⑬	近代秀歌	一一二五～一二二二年	藤原定家	一(八三)
⑭	百人秀歌	一一三五年		一(一〇〇)
⑮	百人一首	一一三五年		一(一〇〇)

ており、深養父は五人しか配されていない四首歌人に配されていることから、比較的評価が高いと考えられる。¹³⁾ ⑫『定家八代抄』についても、『古今集』から『新古今集』までに入集した二十八首のうち、七分の一の四首が選ばれており、入集順位が歌人総数、二三八〇人のうち六十二位となかなかの順位である。¹¹⁾

⑭・⑮は、入集数に差がない作品群であり、選ばれていることに歌人として評価があらわれている。よって、⑪『時代不同歌合』を編んだ後鳥羽院は(歌人)深養父を評価していたといえよう。また、『定家八代抄』でも評価していた定家は、⑭『百人秀歌』・⑮『百人一首』においても深養父を選んでいることから、深養父、もしくは深養父詠歌を評価していたと考えられる。⑦・⑧・⑩・⑬は歌学書類に分類される。⑦『奥儀抄』では「盗古歌証歌」に、「ふるき歌のころは詠むまじきなれども、よく詠みつればみな用ゐらる」として【表二】23番「河霧の」歌を挙げている。⑧『袋草紙』も⑦『奥儀抄』と同様に、公実の「歌を盗む」話の中で【表二】23番「河霧の」歌を挙げ、公実が「歌はかくの如く盗むべし」と言ったことに対して、「誠に興有り」と述べている。⑩『古来風体抄』は深養父詠歌を三首挙げている。編者の俊成は、巻末にて「歌のすがたはこの集どもに見え侍るなり」と記していることから、深養父詠歌を秀歌として評価していたことがわかる。さらに、⑬『近代秀歌』(自筆本)では、秀歌の例として八代集から八三首挙げており、そのうち深養父は【表二】2番「夏の夜は」歌の一首と少ないものの、『古今集』の夏歌の中では深養父の一首しか挙げられておらず、本歌を評価していたことは明白であろう。

以上のように、王朝期を代表する歌人たちは深養父を歌人と
して評価していたと考えられる。しかしながら、公任のみ、ほ
かの歌人と評価の異なる点が見える。その点に関する考察につ
いては、次章で述べたい。

四、公任による〈歌人〉深養父の評価

本章では、公任とその他の歌人との評価の違いを明らかにす
るため、はじめに、公任が編んだとされる私撰集・秀歌撰・歌
学書類に採られた深養父詠歌を一覧する。

【表二】で付した番号に従い羅列すると、十四首の和歌が確認
できる。なお、他人詠1は『拾遺集』では貫之詠とするが、『貫
之集』の諸本に本歌は載っていない。本稿では深養父詠歌とし
て入集数にカウントする。

続いて【表六】は、【表五】に挙げた深養父詠歌がどの文献に
収められているかをまとめたものである。23番「河霧の」歌に
ついて、『三十人撰（現行）』を除き、公任撰の私撰集・秀歌撰
はすべて採歌していることが看取される。『三十人撰（現行）』
の撰者については、公任撰とする久曾神昇氏と、具平親王撰と
する丸山嘉信氏・萩谷朴氏の間で意見が分かれてきたが、樋口

【表五】公任の私撰集・秀歌撰・歌学書類にみえる深養父詠歌一覧

【表二】番号	初句	私撰集・歌学書類にみえる深養父詠歌
2	夏の夜は	『古今集』 卷三 夏 一六六
4	冬ながら（そ）	『古今集』 卷六 冬 三三〇
5	雲ぬにも	『古今集』 卷八 離別 三七八
7	うばたまの	『古今集』 卷十 物名 四四九
10	こひしなば	『古今集』 卷十二 恋二 一六〇三
11	今ははや	『古今集』 卷十二 恋二 一六二三
13	心をぞ	『古今集』 卷十四 恋四 六八五
14	ひかりなき	『古今集』 卷十七 雑下 九六七
18	うちはへて	『後撰集』 卷三 春下 九二
19	いく世へて	『後撰集』 卷六 秋中 三二七
他人詠1	白妙の	『拾遺集』 卷一 春 一七
23	河霧の	『拾遺集』 卷四 冬 二〇二
27	うれしくは	『新古今集』 卷十五 恋五 一四〇三

※ 歌番号・初句の表記は『新編国歌大観』による

芳麻呂氏の研究により、『三十人撰』の「現存本は公任の作物を
具平親王が改撰したものであり、その基になった公任撰の三十
人撰は三十六人撰に発展的解消を遂げ」たという見方に落ち着
いている。¹⁸ 本稿では樋口氏の説に従い、公任撰の歌集・秀歌撰
類にみえる深養父詠歌をもとに、『三十人撰（現行）』が具平親
王撰である可能性と公任の深養父に対する評価について考察し

【表六】公任の私撰集・秀歌撰・歌字書類にみえる深養父詠歌所収一覧

時代	古今											貫之	公任	具平	基俊	清輔	範兼	俊成	後鳥羽	定家
	27	23	他	19	18	14	13	11	10	7	5									
					○									○	①					
		○													②					
		○													③					
		○													④					
									○		○				⑤					
			○												⑥					
		○													⑦					
		○													⑧					
						○			○						⑨					
				○	○										⑩					
		○				○									⑪					
		○				○						○			⑫					
													○		⑬					
													○		⑭					
													○		⑮					

①新撰和歌、②金玉和歌集、③深窓秘抄、④和漢朗詠集、⑤三十人撰（現行）、⑥新撰朗詠集、⑦奥儀抄、⑧袋草紙、⑨後六々撰、⑩古来風体抄、⑪時代不同歌合、⑫定家八代抄、⑬近代秀歌、⑭百人秀歌、⑮百人一首

たい。

次に掲げた【表七】は『前十五番歌合』『三十人撰（現行）』『三十六人撰』における歌人の入れ替わりを示したものである。

【表七】が示すとおり、十五番歌合に採られず三十人撰に採られ、その後の『三十六人撰』で除かれた歌人は深養父しかいない。樋口氏は、公任が『三十人撰』から『三十六人撰』を編む際に「もともとあまり高く評価していない深養父の方は、新し

【表七】十五番歌合から三十六人撰までの歌人撰の変遷

No.	歌人	前十五番歌合	三十人撰	三十六人撰
1	在原業平	○	○	○
2	伊勢	○	○	○
3	凡河内躬恒	○	○	○
4	大伴家持	×	○	○
5	大中臣能宣	○	○	○
6	大中臣頼基	×	×	○
7	小野小町	○	○	○
8	柿本人麻呂	○	○	○
9	紀貫之	○	○	○
10	紀友則	○	○	○
11	清原深養父	×	○	×
12	清原元輔	○	○	○
13	小大君	○	○	○
14	斎宮女御	○	×	○
15	坂上是則	○	○	○
16	猿丸大夫	×	×	○
17	菅原輔昭	○	×	×
18	僧正遍照	○	○	○
19	素性法師	○	○	○
20	帥殿母上	○	×	×
21	平兼盛	○	○	○
22	中務	○	○	○
23	藤原朝忠	○	○	○
24	藤原敦忠	×	○	○
25	藤原興風	×	○	○
26	藤原兼輔	○	○	○
27	藤原清正	○	○	○
28	藤原高光	×	×	○
29	藤原仲文	○	○	○
30	藤原元真	○	×	○
31	藤原敏行	×	○	○
32	傅殿母上	○	×	×
33	源公忠	○	○	○
34	源信明	×	○	○
35	源重之	○	○	○
36	源順	○	○	○
37	源宗子	×	×	○
38	壬生忠見	○	○	○
39	壬生忠岑	○	○	○
40	山部赤人	○	×	○

く加えたい歌人のためにポストを明渡すことにして削ったのだと推定している。樋口氏の見解を考慮に入れ、再び第三章に掲げた【表四】をみてみると、『金玉集』『深窓秘抄』『和漢朗詠集』所収歌と『三十人撰（現行）』の所収歌は全く異なることがわかる。さらに、『古今集』入集数が深養父と同数、あるいはそ

れ以下の歌人は、小町（十七首）・興風（十七首）・是則（六首）・宗子（六首）・兼輔（四首）であり、全員が『三十六人撰』に入集している。よって、深養父が『十五番歌合』も『三十六人撰』にも入集していないという状況は、公任の深養父に対する評価の低さをあらわしているとみななければならない。また、

以上のような状況と、第二章にて言及した『拾遺集』『拾遺抄』の入集状況とを併せて考えるに、『三人十撰（現行）』は公任撰ではなく、具平親王撰だとする樋口説の裏付けとなるであろう。

以上のことから、公任は深養父の「河霧の」歌は評価していたものの、〈歌人〉としては評価していなかったと考えられる。公任が何故、深養父を評価していなかったのかについては公任の歌論や当時の歌壇史との関係を考えていく必要があるため、今後の課題としたい。

五、おわりに

本稿では、従来の〈平安末期に深養父の評価が見直された〉という説に疑問を抱き、勅撰集・私撰集・秀歌撰・歌学書類の入集状況の考察から、深養父は、公任を除く王朝期の歌人たちに常に評価されていたという結論を得た。公任の深養父に対する評価の低さは、『拾遺抄』に深養父詠歌を採らなかったことに加え、『十五番歌合』および『三十六人撰』に採ばなかったことから明らかである。しかしながら、花山院撰『拾遺集』に「河霧の」歌が入集している点や、具平親王撰『三十人撰（現行）』に撰ばれている点を考慮に入れると、『拾遺集』時代にそれなり

の評価があったことが窺われる。よって、深養父は公任を除く『古今集』から『新古今集』の王朝期を通して、一定の評価のあった歌人といえるだろう。

〔注〕

(1) 『尊卑分脈』『群書類従』『続群書類従』『系図纂要』『本朝皇胤紹運録』には異同があり、意見が分かれるところであるが、本稿では藤本一恵・木村初恵『私家集全釈叢書24 深養父集 小馬命婦集 全釈』風間書房（一九九九年）の解説（木村初恵氏担当）の説を参考にした。

(2) 『群書類従』6輯「中古歌仙三十六人伝」

(3) 深養父の生涯については、村瀬敏夫「清原深養父——その歌人としての生き方——」（『まひる野』一九八二年初出、その後、『新典社研究叢書76 平安朝歌人の研究』新典社、一九九四年に所収）や、藤本一恵・木村初恵『私家集全釈叢書24 深養父集 小馬命婦集 全釈』風間書房（一九九九年）の解説（木村初恵氏担当）に、詳細な検討がなされている。

(4) 一冊の講座編集部『古今和歌集』有精堂（一九八七年）「深養父」項

(5) 中村秀真「幻視する深養父」『早稲田研究と実践』第二十

九卷（二〇〇八年）

(6) 拙稿「歌人・元方の評価に関する一考察」（関西大学国文学会『国文学』第一〇〇号、遊文舎、二〇一五年）でも触れているが、『後拾遺和歌集』仮名序に「おほよそ、古今・後撰二つの集に歌入りたるとがらの家の集をば、世もあがり、人もかしこくて、難波江のあしよし定めむことは、さかりあれば、これを除きたり。」（本文は久保田淳・平田喜信『新日本古典文学大系八 後拾遺和歌集』岩波書店、一九九四年より引用）とあり、六歌仙から『古今集』撰者時代の歌人達を除いて集を編んだ旨が記されている。

(7) 『深養父集』の伝本・成立については、山岸徳平氏や久曾神昇氏、久保木哲夫氏をはじめとする先行研究が挙げられ、深養父自作歌の認定についても諸説あるが、本稿ではそれらの説をまとめた藤本一恵・木村初恵『私家集全釈叢書24 深養父集 小馬命婦集 全釈』風間書房（一九九九年）を参考にした。

(8) 田中登・山本登朗編『平安文学研究ハンドブック』和泉書院（二〇〇四年）、三五頁。

(9) 『寛平御時中宮歌合』の主催者は、諸本の問題により、宇多天皇の母后班子女王・醍醐天皇の母后胤子・藤原温子の三

人の候補者が掲げられており、いまだ解決に至っていない。本文は早くに散逸し、証本は二十卷本模写断簡（四首）と神宮文庫本とその転写本である刈谷図書館本がある（参考：『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、二〇一四年）。萩谷朴氏は神宮文庫本に関して、「後に大幅に増補した、信ずべからざる本」とするが、本稿ではそのまま用いた。

(10) 『宇多院歌合』について、『新編国歌大観』の解題（中周子氏担当）では、「の歌合が行われた記録はまったくないが、延喜五年（九〇五）頃に逝去したと思われる友則を含めて貫之・忠岑・定文・興風・深養父という当時最高の歌人たちの歌を合わせていることを思えば、宇多院のもつて、延喜五年以前に行われたとみるのが自然である。」と述べている。

(11) 新日本古典文学大系『後撰和歌集』岩波書店（一九九〇年）の「作者名索引」を参照。なお、深養父と同位の歌人に、右近・藤原興風・平定文・源信明・僧正遍昭・小野道風（五十音順）がいる。

(12) 迫徹朗『王朝文学の考証的研究』風間書房（一九七三年）の校本「新撰和歌」作者名索引を参照。なお索引には、深養父の項目に『古今集』九〇五番（よみ人しらず）の和歌を挙げているが、『新撰和歌』以外は『古今集』と同様に「よみ人

「しらず」として採歌していることから、本稿においても深養父詠歌とはせず、入集数にカウントしない。

- (13) 久曾神昇編『日本歌学大系 別巻六』風間書房（一九八四）年を参照。

- (14) 樋口芳麻呂・後藤重郎校注『定家八代抄（下）』岩波書店（一九九六年）作者別索引を参照。

- (15) 久曾神昇『西本願寺本三十六人集精成』風間書房（一九六六年）

- (16) 丸山嘉信「三十人撰をめぐる問題」（『国学院雑誌』一九五四年三月）

- (17) 萩谷朴『平安朝歌合大成・三』増補新訂版 同朋舎（一九九二年）

- (18) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』ひたく書房（一九八三年）、九頁

- (19) 前掲、八三頁

（さかもと みき／本学大学院生）